

もともと体育会系で、きちっとした読書家ではなかった。今でもその時に興味を持った作家の本を読むことがほとんどだ。仕事から離れた分野の本を読むと気宇壮大になる。例えば、井上靖の本は視界が広がるようで好きだし、池波正太郎は文章がうまい。短い文章の行間に内容がいっぱい詰まっていて、さーっと読むだけでも心が穏やかになってくる。

大きな視野で環境保護を考えている本としては国際日本文化研究センターの安田喜憲教授の『気候変動の文明史』がある。著者は堆積(たいせき)物の層が描く「年縞(ねんこう)」の分析から、年単位で地球の環境史を復元し、氷期から間氷期という大きな地球の環境変動の繰り返しと文明崩壊の因果関係を説いている。本書では「もし気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の予測通り今世紀中の年平均気温が最大5・8度Cも上昇するとすれば、現代文明ははかりしれない害をこうむり、多くの文明が絶滅の危険性にさらされることになるだろう」と指摘する。

こうした現状認識の下で、現代文明を守るためには「利他の精神・慈悲の心をどれだけ人類が維持できるかにかかっている」と著者は語る。欧米に由来する人間搾取系の文明に代わって、全く新たな人間循環系の文明を構築することが必要というのだ。そのノウハウを持っているのは、かつて地球温暖化の時代に、定住革命と土器革命という技術革新を成し遂げ、新しい時代を切り開いた日本を含む東アジアの稲作漁労文明だとも指摘する。

東京証券取引所でも排出量取引を行う時にどのようにマーケットを整備していけばいいのか、関係者で勉強を始めている。このように今ある環境問題や温暖化問題に対処するため、各方面で努力が続けられている。ただ近代欧米流の考え方では、今の環境問題一つとっても根本的な解決にならないという問題意識が漠としてあった。日本古来の思想にある循環思想や共生思想がなければ、地球上の問題は解決できないのではないかという思想のこの本に共感を覚えた。

同様にこの本に共感した中央官庁の中堅の人たちが、NPO法人ものづくり生命文明機構を07年4月に立ち上げた。今でも思想の柱としている。同機構には私自身も理事長として参加している。本書を通じ、共に生き、モノは循環するという発想の下で、新たな時代を生きる思想をつくっていかねばならないと思うようになった。

【余滴 / 読書で広がる世界】

地球環境だけでなく、金融・証券市場も激動の時代を迎えている。財務事務次官などを歴任した林理事長は、東京証券取引所自主規制法人の初代理事長。公平・透明な市場を守るため「当たり前の役割を果たす」と淡々。もっとも「仕事を離れた読書をするとう気宇壮大になる」という言葉通り、幅広い読書経験から、次から次へと話題が飛び出す。視野を広く持ち市場をくまなく監視することが要請される「市場の番人」たるゆえんなのかもしれない。(占部絵美)